

どんな種類の両生類が、別寒辺牛湿原に生息しているのだろうか。1997年5月の繁殖期終了後、この湿原の両生類相を水たまりに産出された卵塊を指標に調査した。その結果、この湿原一帯の低層湿原を中心とする広い範囲で、エゾアカガエルの繁殖水域20地点を確認することができた。しかし、湿原内奥の川の流域にある水たまり、及び乾燥気味の水たまりには繁殖が確認できなかった。

このたび生息が確認されたエゾアカガエルは、1991年に新種記載された種である。そのため、この種の生息分布の情報は絶対的に不足しており、今向の調査で分布の空白地帯の一部が埋められたことと思う。この種以外にも、キタサンショウウオ・エゾサンショウウオ・アマガエルが生息する可能性がある。これらの両生類を厚岸町民の皆さんが見つけたら、厚岸水鳥観察館まで連絡して欲しい。両生類の専門家が確認できなかったという点で、それらの発見は価値の高いものになるだろう。

一方、エゾアカガエルでは繁殖水域に産出された卵塊の中の卵は受精後、胚発生が進行して胚が孵化しオタマジャクシ（幼生）が誕生する。幼生は餌を採って成長し、ある程度の大きさになると変態して陸に上がる。別寒辺牛湿原の場合、その時期は8月末頃と推測され、それまでがエゾアカガエル幼生の生育期間である。このように、これらの水域は幼生が生育するための大切な自然環境でもある。それらがどのようなものであるのかを明らかにすることを目的に、エゾアカガエル幼生の異なった生育水域間（R1とR3）で水深・水温・気温、及びpH値の季節変化を比較し、更に幼生の成長と拡散状況・捕食者の有無を調査した。

その結果、水温・幼生の成長・捕食者の有無の3点に明らかな違いがみられた。幼生が生育する期間を通して、水温はR1よりR3で高かった。幼生の成長もR1よりR3で速かった。捕食者はR1では確認されなかったのに対し、R3では常に存在した。従って、R3ではエゾアカガエル幼生は確実に捕食圧を受けていると言える。捕食圧の高い個体群では両生類の幼生の成長・変態が速いというモデルが提唱されている。高い水温と高い捕食圧が、R3で幼生の成長を促進した可能性がある。R1で幼生の成長が遅かった理由には低い水温と低い捕食圧が考えられる。

結論として、別寒辺牛湿原一帯を占める低層湿原を中心にエゾアカガエルの産卵場所に選ばれた水域は、幼生の生育環境が多様性に富んでおり、彼らは様々な環境に適応できる種であることが示唆された。